The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アーサー・ラヴジョイの観念の歴史叙述と「暗黙の仮定」
Author(s)	柏端, 達也
Citation	年報人間科学. 1991, 12, p. 35-52
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/3602
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学人間科学部〔一九九一年三月〕
『年報人間科学』第一二号三五頁―五二頁

アーサー・ラヴジョイの観念の歴史叙述と「暗黙の仮定」

柏端達也

アーサー・ラヴジョイの観念の歴史叙述と「暗黙の仮定」

本論文は、アーサー・O・ラヴジョイ（1873－1962）が「観念の歴史（the histoty of ideas）」という彼独特の歴史叙述において用いた概念「暗黙の仮定（tacit assumption）」[1]に、注目する。展開はおおよそ以下のとおりである。

一、「暗黙の仮定」は「単位観念」の一つのタイプとされている。そこでまず「単位観念」がどのようなものであるかについて述べる。そして次に「暗黙の仮定」についてラヴジョイ自身がどう語っていたかを述べる。二、「暗黙の仮定」をどのようなものと解すべきか彼の歴史叙述の実践に照らして考察する。そこでは「暗黙の仮定」の概念に対しいくつか特徴づけを行ない、「暗黙の仮定」とはラヴジョイの考えていたような「観念」一般が持つことになる〝暗黙性〟と呼びうる特徴が最も顕著に表れたものにほかならないということを示す。そしてその暗黙性こそが、観念の歴史叙述の歴史性を保証するものであることを示す。三、観念の歴史が、叙述される過去の人々の視点や意図から非常に離れたレベルの事柄を扱いうるものであり、それゆえそれがある種の〝伝統〟を描き出すのに適しているということを示す。四、最後に「暗黙の仮定」の概念が、観念の歴史に対するラヴジョイの価値観や、さらには伝統に対する彼自身の態度とも、深く関係していることに触れる。

一、「単位観念」としての「暗黙の仮定」

ラヴジョイによれば、「ロマン主義」、「神の観念」などと慣習的に一つの名で呼ばれるある時代の傾向や学説の体系や一見ひとまとまりの概念は、いずれも「複雑で異種雑多なものからなる集合体」であり、分析を適用すべき「観念複合体」である[2]。観念の歴史の方法は、それらを、より汎分野的、汎言語圏的、汎時代的な「単位観念」に分析するという手順によって、まず特徴づけられる。

観念の歴史の方法に対する批判者達の多くに共通するのは、彼らがラヴジョイの中に、一見類似しているが本質的に別のグロテスクな歴史観を見い出しがちであるという点である。たとえば、思考体系の基礎に「単位観念」と名づけうるそれ以上分割不可能な最小単位が存在する、などとラヴジョイは考えていない。字面の怪しげな印象に反して、「単位観念」の発想はむしろ常識的なものである。とはいえ『存在の大いなる連鎖（*The Great Chain of Being*）』の序文――そこに彼の方法論が最も明示的に記されているのだが――において使用された分析化学の比喩がいくつかの誤解を招いたことは事実である[3]。したがって、単位観念と文字通りの化学的元素との違いを鮮明にするため、次の三つの点を指摘しておくの

も無駄ではないだろう。

1．まず、何を「単位観念」とし、何を「観念複合体」とするかは叙述の仕方に応じて相対的である(4)。実際ラヴジョイは、一つの観念をある箇所では単位観念として叙述し、別の箇所では観念複合体として叙述している。たとえば、観念複合体であるはずの「存在の連鎖」も、それを構成する主要な三つの単位観念が「あまりに密接にそしてつねに結びつけられてきたので、しばしば一つの単位として機能してきた」のであるし(5)、その構成要素の単位観念の一つであるはずの「充満の原理」についても「微妙に自らと衝突している」と語られるのである(6)。

2．ある一つの単位観念がより細かな単位観念へといくらでも分析可能であることは、単位観念の連続性あるいは〝同一性〟に対する考え方に示唆を与えてくれる。つまりラヴジョイに好意的な最近の論者達が指摘するように、単位観念は「共通の見出しの下にまとめることを正当化するのに充分な家族的類似性を持った…集合体」(7)と解釈すべきなのである。そして、この解釈はラヴジョイの考えに実際整合する。彼は、ある論文の中でロマン主義と呼ばれるものの多様性に触れ、「それらロマン主義のうちのいくつかが、有意味で重要な共通項を持ち合っていたとしても、それが必ず他の任意の二つにとってもまた共通項になるとは限らない」と述べている(8)。たしかに、ラヴジョイがロマン主義を単位観念として扱ったことは一度もない。しかし原理的には単位観念と観念複合体の区別は絶対的なものでないのだから、一つの名を与えられた単位観念についても一般に、ロマン主義についてと同様、その様々な文脈における現れの「全てに共通する何らかの分母の存在をア・プリオリに想定すべきではない」(9)と言いうるのである。

3．しかし以上の点を、単位観念は実はそのような意味においてしか連続性を持たないのだ、という形で強調すべきではない。そのような意味での連続性を持つ単位観念を、まさに一つの単位観念と見なすことが、観念の歴史叙述にとっては不可欠なのである(10)。ラヴジョイは、「ロマン主義」や「プラグマティズム」の驚くべき異種混合性を明らかにしたときでさえ、それらの呼称の全面的放棄を単純に提唱したりはしなかった(11)。

「暗黙の仮定」は『存在の大いなる連鎖』の序文において、「単位観念のいくつかの主要なタイプ」の第一番目に挙げられている。そこでは次のように述べられる。

「あまりに当然のことなので、正式に表現されたり論証されたりせずに暗黙裏に前提とされる信念や、あまりにも自然で必然的に思えるので論理的な自意識の眼によって精査されない思考法。それらはしばしばある哲学者の学説の特徴を、そしてさらにしばしばある時代の支配的な知の傾向を、決定する」(12)。

しかしここで、「暗黙の仮定」が「単位観念のいくつかの主要なタイプ」の一つであるとあまり額面通りに受け取ってはならない。「形式的な定義をしようとは思わない」という前置きの後に示される単位観念のタイプの〝リスト〟は、彼が認めるように「相当に異

種的」であり、一項目に数え上げるべきではないようなものまでも含んでいる。

とはいえ多少図式的にではあるが、〝リスト〟の中の雑多なカテゴリーの二つの極を示すことはできる。その場合、両極の一方には哲学的著作において掲げられたり受け入れられたりしている教義や信条やテーゼがあり、他方には哲学的著作や芸術作品全体から読み取ることのできる嗜好の傾向といったものがある。例を挙げれば、特定の命題や系となって「存在の連鎖」を構成しているような「明確かつ明示的でゆえに確信をもって取り出したり同定したりすることが容易な」(13)単位観念は前者に属し、十七世紀前半の英国風庭園に感じられる前ロマン主義的な「形而上学的情念への感受性」(14)は後者に属している。ラヴジョイが「思想の歴史と嗜好の歴史」(15)と言うとき、それらは「観念の歴史」の下位クラスと考えられているのであって、それぞれの極はその二つの歴史にほぼ対応すると言える。ここで、「暗黙の仮定」は「信念」であり「思考法」であるから、単純にこの二極のどちらか一方に属しているとは言えない。

〝リスト〟の項目は互いに排他的ではない。ラヴジョイが挙げたいかなるタイプの単位観念も、「暗黙の仮定」としての側面を持つと言えてしまうのである。実際、「存在の連鎖」を構成する単位観念も「中世を経て十八世紀後半に至るまで、多くの哲学者やほとんどの科学者、そしてそれどころかほとんどの教養ある人々が疑問を抱くことなく受け入れることになった」とされるし(16)、「形而上学的情念への感受性」も「多くの哲学者達の論理を微妙に導くことによって、哲学体系の形成において大きな役割を果たす」とされるのである(17)。

ラヴジョイが自らの方法論を述べた箇所は、誤謬に満ちたものではないが、しかし彼が歴史叙述を実践している箇所を基準にするなら、やや曖昧で誤解を招きかねないところがないとは言えない。そこで以降で、実際にラヴジョイが思想史をいかに叙述していたのかを、とりわけ「暗黙の仮定」の概念との関わりにおいて考察する。

後に説明する意味での暗黙性は全般的に単位観念が持つ重要な特徴である、と私は考える。「暗黙の仮定」は、単位観念のその暗黙性を最も象徴的に示す概念である。したがって「暗黙の仮定」の概念が正確にどのようなものであるか述べることは、ラヴジョイの観念の歴史叙述の基本的な側面の一つを明らかにすることにほかならないと思うのである。

二、「暗黙の仮定」の暗黙性について

本節では、「暗黙の仮定」という概念について、よりラヴジョイの観念史叙述の実践に配慮しつつ、考察する。

まず「暗黙の仮定」を、精神分析批評の文脈に適合しそうな別の概念と同一視すべきではない。すなわち、暗黙の仮定が存在しているということは、無意識へと抑圧されたものが著者の知らないうちに、主張の他の部分と矛盾する形で時折顔を出したり、主張全体を偏らせたりしているということではない。たしかに、ある暗黙の仮

定を抱いていたとされる特定の一人の著者について、そのような説明がもっともらしくあてはまる場合があるかもしれない。しかし必ずそうなるというわけではない。いずれにせよ精神分析批評的な概念は、それが著者の背後で現に働き続けているメカニズムを連想させるかぎり、観念の歴史叙述になじまない(18)。

では、どのようなものが暗黙の仮定であるのか。以下の五点が重要であると思われる。

1. まず「暗黙の仮定」は一個人のみについてのものではない(もっともこれは「単位観念」一般の特徴なのだが)。暗黙の仮定は「しばしばある時代の支配的な知の傾向を決定する」。それは、「非常に一般的で漠然としたものであるため、ほとんど全ての主題に関する人間の考察の筋道に影響を与えうる」(19)ほど汎領域的であり、また多かれ少なかれ汎時代的でもある。

2. 暗黙の仮定が「正式に表現されたり論証されたり」「論理的な自意識の眼によって精査され」たりしないのは、それが「あまりに当然のことで」、「自然的かつ必然的に思える」からである。暗黙の仮定は、第一には、それを有すると言われた当人がそのことを頑として否定するような類のものではない。暗黙の仮定とされるのは、ふつう、テクストの中のいくつかの文が公然と含意している事柄である。ただ、著者が暗黙の仮定をそのままの形で口にしているような場合もある。その場合それを「暗黙の仮定」と呼ぶのは、それが(別のより自明ではない主張の)それ以上説明を要しない根拠として軽く触れられているにすぎないからである。

3. ただし、あるテクストにおいて含意されることや、議論の必要がないかのような形で提示されることの全てが、すぐさま観念史家にとっての暗黙の仮定であるわけではない。というのは、そうしたものは無数にあり、それだけではせいぜい暗黙の仮定になりうるという程度のものでしかないからである。

4. 重要なのは、つねに暗黙の仮定が後の変化 —— とりわけ暗黙の仮定が暗黙の仮定でなくなるという出来事 —— に照らした形で叙述される点である。無数の候補の中からそのような仕方で遡及的に取り出されたもののみが、観念の歴史における暗黙の仮定なのである。したがって暗黙の仮定は、観念の歴史家には見て取ることのできる他の選択肢や偏りを —— あるいは、もはや平凡な真理とは言えなくなったときに初めて生じるその暗黙の仮定の意義を —— 当時の著者は(当然)知りえないという意味において、その著者にとって暗黙的である、と言える。

5. 暗黙的であるということを以上のように規定すると、次のような結論が得られる。すなわち、過去のある著者によって特定の文脈の中で明確な形で主張されたテーゼについても、(それが別の文脈では暗黙のうちに仮定されることがあるというだけでなく、)つねに何らかの側面における暗黙性を持つ、と言うことが可能になるのである。観念の歴史における観念は、それを叙述する歴史家の視点からのみ見て取ることのできる側面を、備えているのである。

以上の点を、ラヴジョイの実際の叙述を例に、ほぼ項目順に確認

していこう。

『人間本性についての省察（*Reflections on Human Nature*）』において叙述の中心となる十七世紀および十八世紀（前半）の諸観念は、いずれも暗黙の仮定としての側面を持っている。それらの観念の多くは、「一定の階級の著述家や一つの学派に特殊なものではなく」、「十七、十八世紀の人間本性の探求者に、広く――全員とは言わないが、そのほとんどに――受け入れられて」いた[20]。またそれらは、「相当数の文献の中に、明示されずとも暗に含まれているのが、もし探したなら認められうる」[21]ようなものであり、あるいは「あまりに明白に真なので賢明かつ現実的精神を持った読者ならその正しさを議論を必要とせずに認めるに違いないようなものとして、しばしば単にそうとだけ述べられる」[22]ようなものである。

バーナード・マンドヴィルの『蜂の寓話（*The Fable of The Bees*）』において典型的に見い出される諸観念――「私悪公益」の副題が象徴する観念を含む一群の観念――も、その例外ではない。「マンドヴィルは見掛けよりも独創的でない」[23]。マンドヴィルは、たとえば一見正反対の気質を持つと思える同時代人ジョセフ・バトラーとさえ多くの観念を共有している。さらに『蜂の寓話』に書かれているようなことは、「マンドヴィル以前のいく人もの人々――J・アバディのような尊敬される正統派の神学者だけにかぎらず――によってすでに言われてきたことである」し、また「彼以降にも、他の優れた著者達――おそらくそれをマンドヴィルから学んだのではない著者達や、学んだとしても彼のような評判の悪い先行者に負っていることを認めない著者達――によって、繰り返し述べられていく」ことなのである[24]。その十七、十八世紀的な観念複合体の繰り返しは、より典型的かつ洗練された形でジョン・アダムズの政治理論および実践への適用において（マンドヴィル以外の十八世紀人からの引用を伴って）見られ、そして、そのより限定的な文脈への適用が、やや重点を変えられてソースタイン・ヴェブレンの富の獲得の動機の理論において（「ヴェブレン自身が自覚していたという証拠はない」[25]もののしかし明確に）見られるのである。

ラヴジョイは、人類が道徳を獲得する過程や子供が道徳を習得する過程についてのマンドヴィルの説明[26]の中にいくつかの暗黙の仮定を見い出す。たとえば、それらの説明がプライドへの潜在的な感受性の存在を前提としているところに、〝プライドは人間に普遍的、本質的な情念である〟[27]という観念が見い出される。その観念は、パスカル、ヤングといった傑出した著者からJ・マリアーナ、ラ・プラセットといったどちらかと言えば凡庸な著者に至るまで、当時の非常に多くの人々に共有されていた観念なのである。また、それよりはマンドヴィルに特徴的な（しかしある非常に流布していた観念を前提にした）観念〝理性を持つことによって人間は他の動物から区別される（そして人間の理性的行動に不可欠な動機が、プライドである）〟も見い出される。この観念に関してラヴジョイは次のように述べる。「マンドヴィル自身が人間の偉大さや合理性を

深く感じていたとか、読者にその種の重大な見解を伝えようとしていたとか言うならミスリーディングになろう。にもかかわらず彼は…明らかに〔その観念を〕想定していたのである」(28)。

だがテクストが含意することというだけなら、ラヴジョイが取り出した上掲の暗黙の仮定の他に、まだいくらでも取り出すことができる。たとえばマンドヴィルのテクストの同じ箇所から〝子供の社会性の獲得に親は重要な役割を果たす〟という前提を読み取ることもできる。また、人間の社会の寓話として蜂の社会を描いている箇所から〝蜂は文明人ではない〟というきわめて些末な含意も引き出せる（蜂が、まさに寓喩の対象であるところの文明人――当時のイギリス人のような社会生活を営んでいる人間――にカテゴライズされたなら、そもそも寓話が寓話でなくなるから）。もちろんこれ以外にもまだ無数に多くの事柄がマンドヴィルのテクストに含意されている。

しかしラヴジョイが暗黙の仮定として取り出したものは、少なくとも今日では疑問視しうる。我々は、マンドヴィル以降の人間本性についての様々な別の議論や、さらには人間本性について議論すること自体についての議論を、知りうる立場にいるからである。それに対し前段落でためしに取り出した二つの事柄は、今日においても特に疑問視されることがない。とりわけ後者については、かつて蜂が文明人にカテゴライズされたことやこれからそうなることを想像するのがまるで困難なため、わざわざ明示的に取り出すのが無意味に感じられる。暗黙の仮定の取り出しは、それがまさに暗黙の仮定として影響を及ぼしている範囲の外側からのみ可能なのである。対象化、相対化できないままに自分自身の〝暗黙の仮定〟を取り出したとしても、結果はひどく冗長で馬鹿げたものでしかない。

暗黙の仮定の（そして一般に単位観念の）叙述が、歴史家の視点を不可避的に反映する点について述べよう。

「プライド（pride, *orguei*）」は、『人間本性についての省察』が扱う十七、十八世紀のいわば鍵概念（キーコンセプト）である。その語も当時の「非常に多義的で混乱した」言葉使いの影響を受けていることにおいて例外ではない。ラヴジョイは「プライド」の語の弁別されるそれぞれの意味に彼自身の言葉を割り当てる。そして「プライド」の語が当時、自負や自己称賛欲といった今日的な意味の他に、「賞賛されたさ（approbativeness）」――自分自身についての肯定的評価を他人から得たいという欲望――の意味でも使われていた点に、とりわけ注目する(29)。たとえば〝プライドは人間に普遍的、本質的な情念である〟という観念における「プライド」は、通常、賞賛されたさを意味する。「それ以外のほとんど全ての事柄に関しては互いに同意しないが、その点に関してなら著者達の見解は一つである」(30)と言えるほど多く人々が想定していたのは、この賞賛されたさの普遍性という観念にほかならない。賞賛されたさという意味を切り出すことによってはじめて、「プライド」が、その同義語のうちのあるグループ――すなわち、「love of fame や passion of glory や quest of honor や他の何度も繰り返して現れる様々な表現」(31)――とともに注目されるのである。

また、ラヴジョイによればこの賞賛されたさの普遍性の観念は、〝プライド（少なくとも、賞賛されたさ）は人類に固有であり、それは情緒面、欲求面において人間を区別する精神の指標である〟という観念と、「それを厳密には含意しないはずなのに、しばしば結びつけられていた」(32)。このように二つの単位観念として分解して取り出すのは、それらが単に論理的に別物であるという理由からだけではない。それは、その結びついていた別の観念が、たとえばルソーにおいて、人間を他の動物から区別するものとしての「進歩」や「完成可能性」という観念へと結びついていくからである（そして「完成可能性」は、後の、『人間本性についての省察』が扱わない観念史の展開に照らして、重要である）。

さらに「賞賛されたさ」という表現の仕方自体、歴史家の視点を反映している。そのような形に表現することで、ラヴジョイは、人間の情念の当時の分析家の「奇妙な一面性」をほのめかすのである(33)。彼によれば、十七、十八世紀の著者達は肯定的評価の獲得と否定的評価の回避という欲求の二面性を考慮せず、いずれか一方を中心に論じていた。そしてさらに、ほとんどの論者において（ロックのような少数派は別として）、中心となる側面は肯定的評価獲得の欲求の方であった。

さて、ラヴジョイは「観念複合体」を単なる複合体ではなく「不安定な複合体である」とした(34)。ここで、観念の変化を叙述するラヴジョイの典型的かつ特徴的な仕方について述べておこう。

「暗黙の仮定」が〝無意識〟の中に抑圧された前提と同一でないことはすでに示した。だが暗黙の仮定もまた、ある意味での矛盾、対立、葛藤を生み出すのである。ラヴジョイは、諸観念の間の関係の中で、対立の関係を特別に重視していた。そのことは、彼が「弁証法的動因」を単位観念のタイプの一つとして（整ったリストを作るならタイプの一つには数えない方がよいにもかかわらず、敢えて）あげていることからも察することができる。ただし、諸観念の対立は第一に歴史的過程における対立である。ここで言う歴史的過程とは、概略的に述べるなら、ある著者や学派の内部に無自覚的に持ち込まれた観念や、あるいは持ち込まれた時点でまだ導出されていなかったその観念の系が、後に体系内の別の観念と衝突することが顕著になり、問題を孕むものとして自覚的に吟味されるようになる過程である。

むろん、暗黙の仮定がもはや「暗黙の仮定」でなくなったときには、個々の著者が自らの内部の観念の衝突を、問題として自覚することだろう。また「暗黙の仮定」でなくなりつつあるときは、充分に自覚されない対立がある著者において何かの動因になっていると言うのがもっともな場合もあるだろう。だからこそ「葛藤する諸観念や、感覚や嗜好の一致しない諸傾向から生じる、ほとんど全ての個々の著者の心の中の――そして、ときには一つの著書、あるいは単一の頁の中にさえ見い出される――内的緊張や動揺」(35)が注目に値するのである。

以上のような叙述のパターンは『存在の大いなる連鎖』における変化の叙述の基調を成している。その例を一つ示そう。（『人間本

性についての省察』における叙述の中心は、限定された一時期の諸観念の多様な展開とその影響であり、特定の観念の変化や消滅の過程は詳述されない。）

ラヴジョイによれば、十八世紀初頭に、存在の多様性や種の充満に対する考え方に変化が起こった。「存在の連鎖の時間化」である。存在者や種の充満は、最初からそして永遠に静的で完全な秩序としてではなく、宇宙史の中で徐々に実現されていく自然の計画として考えられるようになったのである。ラヴジョイはこの変化を、別の宗教的な情念との反発によって説明する。十八世紀に入ると〝静的な存在の連鎖〟から導き出される帰結――すなわち、〝宇宙全体がすでに完全に善ならば、悪が消滅する見込みはない〟および〝他の位のものを蹴落さずには存在の梯子を上昇できない〟――は、道徳的な希望を欠いているとますます思われるようになる。彼は言う。「…充満の原理のこの二つの含意に対する反逆は、それらの含意が十分に明らかになるや否や、避けられなかった。一般的な進歩や、他の場所での墜落によって釣り合いをとるのではない個人の進歩を認めるように、存在の連鎖はやむをえず解釈し直さなければならなかったのである」(36)。

アディソンやライプニッツやヤングなどの著作において、〝被造物全体が無限に上昇して行く存在の梯子〟や〝終わることのない進歩としての人間の運命〟、あるいは〝形而上学的な天体進化〟といった観念が出現するのを、ラヴジョイはこうした過程のもとに捉えるのである。

観念の歴史は、ちょうど物語がまだ何もしていない主人公に注目するような仕方で、過去の暗黙の仮定に――そしてもちろん、暗黙の仮定だけでなく単位観念一般に――注目する。さらに観念の歴史家は、非常にしばしば、過去のテクストから当時の著者達には不可能であるような仕方で観念を取り出してくる。それはちょうど伝記作家が、生まれたばかりの赤ん坊を、その場に居る産婆には不可能な具合に、「『プリンキピア』の著者」と記述するのに似ている。とりわけ暗黙の仮定は、それがまさに「暗黙の仮定」であるがゆえにそれを抱いている当人には他の選択肢が見えず、その当人にとって取り出すことがそもそも不可能なのである。

観念の歴史家もまた、アーサー・ダントの言う「過去の遡及的再整理」(37)を行なっているのである。そしてそれが、ダントの言うように、歴史叙述はおろか我々が過去について述べる際にはそうせざるを得ないようなきわめて基本的な仕方であるなら（そしてまさにそのとおりであると思うが）、観念の歴史叙述も、他の受容可能な様々な歴史叙述と同様、紛れもない歴史性を持っていることになる。単位観念が不変化であるとラヴジョイが想定していたと考え、そこから観念の歴史叙述の「非歴史性」を批判する論者達(38)は、「単位観念」が（とりわけ「暗黙の仮定」が典型的に）持っているこの歴史性を見落としていたのである。

三、「暗黙の仮定」と意図、および伝統の叙述

さて、観念の歴史の過程はしばしば長期に渡り、アイロニカルな色彩を帯びることがある。ラヴジョイは次のように言う。「ある世代によって、それに合った哲学的気分や傾向に仕えるようにと導入された原理が、しばしば、思ってもみなかった反対の傾向の芽を持っていること――すなわちその隠された含蓄のために、それが奉仕するようもくろまれていたその時代精神の破壊者になること――が分かるというのは、観念の歴史の示唆に富むアイロニーの一つである」(39)。ラヴジョイのテクストに「意図せぬ」、「思いもよらない」といった表現が頻出するのは、決して偶然ではない。

観念史叙述のこうした傾向に対して、次のような批判が考えられる。すなわち、暗黙の仮定は、それが見い出せるテクストにおいて著者が本当に言おうとしていたことでは全くない、あるいは著者の意図とは全く関係がない。ゆえにそれは〝神話〟的な、あるいはせいぜい付属品的な、概念にすぎない、といった批判である(40)。

テクストを作り出すことを一種のコミュニケーション行為と見なし、その行為において「意図されていたこと」こそが（思想史家が把握することに専ら努めるべき）その行為の本当の「意味」であると考えるなら、たしかに観念の歴史の方法の中には受け入れがたいものを感じるだろう。しかしこの種の批判は、結局、きわめてグロテスクな主張――行為者にとって意図的とは言えないような行為の記述や、行為者が意図しなかった行為の帰結に照らして為された当の行為の記述は、その行為の〝真の〟記述に比べれば全く重要でないとする主張――か、さもなくば、なし崩し的に後退して中身のない主張――「著者が本当に言おうとしていたこと」を知るには、「著者が本当に言おうとしていたこと」を知ることが不可欠であるといった主張――のいずれかに至るものと思われる。むろん著者の「意図」をある程度特定された形で「再構成」でき、しかもそうすることが有用であると言いうるような文脈もあるだろう（そしてその場合、作業はつねに細心の注意を要するとはかぎらないのだが）。しかし、ある行為に関して、その行為がとにかく一つの記述のもとでは意図的なその人の行為であったとさえ言えれば（あるいはそうとしか言えず、かつそれで）充分であるような文脈も存在するのである。そして実際そのような場合は少なくない。さらに当然のことながら、ある行為の帰結がその行為者の意図したものではないことを言うために、その行為者の「意図」を何らかの確定的な仕方で「再構成」する必要がつねにあるなどということは全くないのである。

ある行為は無数に多くの仕方で捉えられうる。行為者の意図とは無関係な具合に記述された行為の記述も、さらに、時間的にはるかに隔たった行為の帰結から遡って為された行為の記述も、まさしくその行為者によるその行為の記述たりうるのである(41)。そしてまた一般に出来事は、後の出来事との関連性の下に――そして、その関連性が生じて初めて可能となるような仕方で――いく通りにも記述されうるのである。観念の歴史叙述は、多くの場合当時の人々

にはそもそも感知され得ない――ゆえに当の著者の意図（そこには〝無意識の意図〟といったものも、もしあるなら、含まれる）とは直接関係のない――暗黙の仮定を、後の（時には特徴的にも何世紀も後の）変化に照らして描き出すのである。

観念の歴史叙述は現在の立場から過去を再構成する一つの方法に違いないが、しかしラヴジョイは歴史学を、第一に歴史家が現在直面している問題を解くためのものと考えていたわけではない。彼によれば歴史学には固有の価値があり、歴史家には固有の関心がある。注目すべきはむしろ「それだけでは〔歴史家自身の〕目標のための道具にはならないような先人達の独自の目標」や、「自分や自分の同時代人にはそうは思えないような、過去の人にとって関心のある問題、正しいと思える推論、価値ある信念」なのである(42)。

言うまでもなく、一般に、過去のテクストの中に現代の歴史家にとってはどうでもよいような問題への執着や正しいと思えない推論や奇妙な信念が見い出されるとき、それらを直ちにその著者が責任を負うべき著者の非合理性に帰してしまうのは早計である。ラヴジョイは正当にも（他にも正当な方法はあろうが）、それらのうちのあるもの（全てのものではない）を、より広い文脈において――すなわち当時の多くの人々に受け入れられていたり、〝伝統〟として当の著者に受け継がれていた諸信念や諸観念の網の目の中に位置づけることで――説明しようとしているのである。

たとえばラヴジョイは、賞賛されたさを執拗に悪徳と見なす傾向の一つの背景に原始主義の伝統(43)を見い出す。また、賞賛されたさに関する「奇妙な一面性」を、一時代の著者達に特色を与え、さらにはプライドに関する観念を様々な文脈へと適用する彼らの仕方に特徴的な限界を与えるものとして、叙述する。

「奇妙な一面性」に代表される奇妙さを、前述のような批判をする者は時代錯誤的な〝神話〟と見なすかもしれない。しかし一般に伝統や慣習と言われるものの多くは（全てと言うつもりはないが）そもそもそうしたものなのである。つまり、その影響圏外からのみ記述が可能であるようなもの――ある範囲の人々を現に制御しているメカニズムとしてではなく、いわば言語ゲームのずれとしてのみ我々の前に姿を現わすようなもの――なのである。そしてそのような〝伝統〟は、伝統の意味の重要な一つを構成していると思えるのである。

記述されうる暗黙の仮定は無数にあるのだから、ゆえに記述されうる〝伝統〟も無数である。しかし、そうした多数性はすぐさま無政府的な恣意性を意味するわけではなく、また、すでに述べたような遡及性は我々が過去について語る際にはそうせざるを得ない一つの仕方を表しているのだから、まさに暗黙の仮定が「ある哲学者の学説の特徴、さらに、ある時代の支配的な知的傾向を決定」し、まさにこれこれの伝統が「見い出される」と、言いうるのである。

四、観念の歴史学の価値と「暗黙の仮定」

以上のように特徴づけた「暗黙の仮定」一般から、我々は逃れることができない（それは、どちらかと言えば些末な真理であり、憂えるべきことではない）。しかし、ある特定の暗黙の仮定から逃れることは可能であり、また、しばしば否応無しにそこからはみ出てもしまう。暗黙の仮定からはみ出てしまう過程とは、他の観念との対立がますます明白になり自覚せずにはいられなくなる（観念の歴史家の叙述の対象となるような）歴史的過程である。それについてはすでに述べた。一方、歴史家が自らの暗黙の仮定から自由になる可能性は、歴史学に対するラヴジョイの価値観が表明された箇所に示唆されている。

ラヴジョイは「人間の精神の働きとその多様性の範囲に光をあてること」(44)が観念の歴史叙述の一つの重要な機能であると考えていた。過去の著者の我々との隔たりや、過去の著者達の間の圧倒的な多様性を受け入れることで、これまで暗黙裏に仮定していたある事柄がそれほど自明ではなく多様な選択肢の一つにすぎないと思えるようになるかもしれない。ラヴジョイによれば、一般に「歴史の研究は、つねに、現在の限界や先入見を越えることをある程度めざすもの」である(45)。そしてさらに、そのように「現代的な問題への拘泥」から自由であれば、歴史研究は我々を新たな問題へと導いてくれるかもしれないのである(46)。

多様性が表れる絶えることのない過程そのものの中に、ラヴジョイが価値（美的な価値も含めて）を認めていたことは間違いない。ただ彼にとってその多様性は、それを通して何かがより一層実現されてゆく過程としての多様性ではなく(47)、また、それぞれが個性記述のみを受け付けるような徹底的に共約不可能な諸精神風土としての多様性でもない(48)。彼は、「歴史家の仕事は…人間の思想と感じ方と行動における変化するものと一定なものとを知ることである」と述べる(49)。ラヴジョイ自身にとって「一定なもの」とは汎領域的汎時代的な「（単位）観念」であり、そしてそれよりもおそらく広域的な「異なる分野に共通の問題」(50)や、思想史において受け継がれる「一つの」「永続的な問題」である。多様性はつねにそれらの連続性の下で捉えられるのである。

ラヴジョイが自らにとっても「永続的な問題」であると考えていたのは、デルフォイの神託に象徴される「人間の本性と人間の（広い意味での）振舞いについての問題」である(51)。その問題は「永続的」であるがゆえにその意味において「現代的な問題」である、とラヴジョイは考える。それで彼は『人間本性についての省察』において、自らをその問題の伝統の一部に位置づけたのである。

この形容詞「永続的な（perennial）」をあまり強く取るべきではない。一本の太い幹に貫かれていないという点で、それは観念の〝連続性〟と同様である。また、その「永続的な問題」の永続性は、永続的に思えた過去の他の問題と同様、原理的にはいつ思わぬ仕方で断ち切られるか分からない。この点はラヴジョイの強調するところではないが、彼の歴史叙述の方法に整合する。存在の連鎖をめぐ

る問題――宇宙の構造あるいは被造物の秩序についての「一つの」問題――は、ラヴジョイがその歴史を描き出した時点ですでに「永続的な問題」ではなくなっていた。一方、すぐには否定されそうにない永続性を得るのに、人間本性をめぐる問題は、〝汝自身を知れ〟のようにきわめて漠然とした一般的な形をとらざるをえない。

となると「一つの」「永続的な問題」の想定は冗長な付け足しに思えるかもしれない。しかしラヴジョイは次のように述べる。「歴史学は、言葉の最も広い意味での人間学の一分野である。そして歴史家は、デルフォイの神託を完遂させようとする人類の努力に、彼自身の仕方で貢献しているのである」(52)。ここから、思想史の伝統を――その伝統は一定の方向を持った一本の太い幹ではないもののそれでも――継承しようとするラヴジョイの意志が読み取れる。今日では、この態度を頑なであるとして拒否することもできよう。しかしながらラヴジョイの叙述に沿って述べるならば、いずれにせよ我々は、好むと好まざるとにかかわらず「しばしば思ってもみない仕方で」伝統を継承しているのである。

注

(1) この語をラヴジョイが定まった形で提示しているわけではない。箇所によっては、「implicit assumption」、「tacit presupposition」、「preoccupation」などの別の表現が使われたり、動詞の形で表現されたりしている。しかしそれらも全て「暗黙の仮定(tacit assumption)」のことを言っているのである。

(2) *The Great Chain of Being* (Cambridge, Mass., 1936. 以下GCB と略記)、pp. 3－6〔邦訳十二～十五頁〕を参照。引用語句はp. 3から。

「〔観念の歴史の〕手順の第一は、――アナロジーには危険がつきものだが――分析化学の方法にどこか類似していると言える。たとえば哲学の学説の歴史を扱う場合、観念史家は強固な個々の体系に入り込み、自らの目的のために体系をその構成要素に、すなわち単位観念とでも言うべきものに分解する。どんな哲学者や学派の学説の総体も、ほとんどつねに複雑で異種雑多なものからなる集合体であり、それはしばしば当の哲学者自身が思ってもみない仕方でそうなのである。」(*ibid.*)

(3) たとえばNils B.Kvastad. "On Method in the History of Ideas" (*International Logic Review*, 9 (1979), 96－110) においては、「単位観念」が、単なるテクストの構成要素と同一視されている。

(4) この論点は、ルイス・ミンクの攻撃――ミンクは「単位観念」の「不変化性」を問題にした――に対するフィリップ・ウィーナーによるラヴジョイ擁護において暗示されている (Philip P. Wiener, "Some Remarks on Professer Mink's Views of Methodology in the History of Ideas," *Eighteenth-Century Studies*, 2 (1968), 311－317)。また、フランシス・オークリーが*Omnipotence, Convenant, & Order* (Ithaca, 1984) において、ラヴジョイによる単位観念の動的側面の叙述をより明確に指摘している(同書p. 39参照)。なお、この論点を踏まえ、以下では「単位」あるいは「複合体」としてのいずれかの側面を強調する必要がない場合、単に「観念」と表記する。

(5) GCB, p. 20〔二七頁〕、傍点引用者。

(6) GCB, p. 205〔二一六頁〕。実際、「充満の原理」はラヴジョイの考えていた以上に変化に富む歴史的展開を見せているとの指摘もある。Simo Knuuttilla (ed.), *Reforging the Great Chain of Being* (Dordrecht, 1981) は、とりわけ様相観念の歴史における「充満の原理」の複雑で多様な展開の、より「正確な」叙述を目的としている。ラヴジョイのその「見落し」は、彼が「充満の原理」を専ら「存在の連鎖」の一構成要素として扱ったからであるというのは正しい。しかし論争的

な印象の題名に反して（そして、所収されているJ・ヒンティッカの論文におけるラヴジョイの方法論に対する批判的な意図とは裏腹に）、この論文集全体を貫く精神はむしろラヴジョイのそれに近いものである。つまり論文集は、観念複合体としての「充満の原理」の歴史の叙述の可能性を示唆しているのである。そのような歴史叙述の存在がラヴジョイの方法論と原理的に衝突しないことは言うまでもない。

（7）Moltke S.Gram & Richard M.Martin, "The Perils of Plenitude," *Journal of the History of Ideas*, 41 (1980), 497－511, p. 509. なお…は引用者による省略を表す（以下でも）。

（8）"On the Discrimination of Romanticisms," *Publications of the Modern Language Association*, 39 (1924). ただし、この論文は*Essays in the History of Ideas* (Baltimore, 1948, 以下EHIと略記）に収められており、そちらを参照した。所収箇所は同書の229－53。引用は、p.236から。

（9）*ibid.*

（10）ゆえに「単位観念」の概念の放棄というダニエル・ウィルソンのおそらく好意的な提案（Daniel J.Wilson, "Lovejoy's *Great Chain of Being* after Fifty Years," *Journal of the History of Ideas*, 48 (1987), 187－206, p. 205参照）は、思感に反して、ラヴジョイの方法論の根本的な破壊か、よくても中途半端な隠蔽をもたらすことであろう。

（11）ただ、こうした語の多義性に無自覚な使われ方に対してラヴジョイが苛立ちを覚えていたことも、事実である。しかし「プラグマティズム」に関して言うなら、それが、互いに論理的に独立で、あるものとあるものは両立不可能ですらある諸テーゼに分析できるとしても、「プラグマティズム」という一つの名が与えられた動向の間に（歴史的に見て突出しているため）他の特徴よりは本質的であると言いうるような特徴などそもそも全く存在しない、と決めつけるのはラヴジョイの立場でない。（*The Thirteen Pragmatisms and Other Essays* (Baltimore, 1963) のとりわけpp.31-32を参照。）

（12）GCB, p. 7〔一五頁〕。次段落の引用語句も同頁から。

（13）GCB, p. 14〔二二頁〕。

（14）「形而上学的情念」については、GCB pp 10－16〔一九～二三頁〕を参照。

（15）EHI, pref. vii.

（16）GCB, p. 59〔六一頁〕。

（17）GCB, pp 13－14〔二一頁〕、傍点引用者。

（18）ラヴジョイが当時の流行であった精神分析学的な考え方に距離を置いていたことは確かである（たとえば、*Reflections on Human Nature* (Baltimore, 1961, 以下RHNと略記）、p. 12を参照）。しかし、慎重にではあるが、ときに精神分析批評家に好まれそうな表現を使っている。ある箇所で彼は、過去の著者が「自らが受け入れた前提の必然的で明白な含意を見落とすこと」について、そうした事態は「しばしば、実際にあっても明示されないかあるいは意識下の事実の徴しであり」、そして「もし可能なら心理学的説明を要求する」と述べるのである（"The Meaning of Romanticism for the Historian of Ideas," *Journal of the History of Ideas*, 2 (1941), 257－278, p. 265）。

（19）GCB, p. 10〔一九頁〕。

（20）RHN, p. 131. とはいえ、全ての人が同じことを言っていたように語られているわけではない。単位観念のあるものは相対的により一般的（ポピュラー）でないことが分かる。またラヴジョイは語の多義性に注目するが、それは、単位観念として叙述したもののさらなる区別の可能性を示唆している。

（21）RHN, p. 12.

（22）RHN, pp. 141－142.

（23）RHN, p. 170.

（24）RHN, p. 179.

（25）RHN, p. 210.

（26）『蜂の寓話』の「道徳の起源の探求（Enquiry into the Origin of Moral Virtue)」の箇所を参照。その箇所はこの二つの説明を中心に構

成されている。

(27) このような書き方はラヴジョイの慎重さを損なうものである、と思われるかもしれない。しかしこの書き方は、ある単位観念が見い出されるあらゆる具体的場面から独立したその基準型の提示を意図したものではない。そうではなくて説明の簡便さの観点から、比較的単純に表現された単位観念の一例でもってその名前の代わりとしたのである（『存在の大いなる連鎖』と異なり『人間本性についての省察』においては単位観念の一つ一つに一定の名が付けられていないが、このように叙述の〝主役〟となるいくつかの単位観念を読み取ることは可能である）。

(28) RHN, p. 176. なお〔 〕内は引用者による（以下でも）。

(29) RHN, pp 87－91, pp 129－131を参照。引用語句「非常に多義的で…」はp. 129から。「賞賛されたさ（approbativeness）」の概念をラヴジョイは、歴史的文脈を全く異にする骨相学から借りてきている。もちろん「賞賛されたさ」自体、様々な種類や程度の情念を含んだ類的概念である。そしてラヴジョイ自ら、ジェームズやクラットン＝ブロックなど彼と（ほぼ）同時代の心理学者の仕事を引き合いに出しながら、賞賛されたさや関連する情念、およびそれらの関係について考察している。（RHN第Ⅲ章）。ラヴジョイはその考察を十七、十八世紀の諸観念の分析に役立てようとしているのであってその逆ではない、という点が重要である。

(30) RHN, p. 131.

(31) RHN, p. 130.

(32) RHN, p. 144. なお、さきほどマンドヴィルのところで二番目に挙げた観念は、プライドの人類による専有性というこの観念に、〝理性的行動の動機は、情念にほかならない〟という特徴的な（ヒュームにつながるような）観念と、〝社会的場面で機能している情念のうちで最も基底的なものはプライドである〟という広く受け入れられていた観念をつけ加えたものと考えることができる。

(33) RHN, p. 136.

(34) GCB, p. 3〔一二頁〕。

(35) EHI, pref. xiii－xiv.

(36) GCB, p. 246〔二六〇～二六一頁〕。

(37) Arthur C.Danto, *Analytical Philosophy of History* (Cambridge, Eng., 1965)〔『物語としての歴史』（河本英夫訳、国文社、一九八九年）〕、Ⅶ章参照。引用語句はp. 168〔二〇四頁〕から。

(38) 典型的なものを挙げると、Louis O.Mink, "Change and Causality in the History of Ideas," *Eighteenth-Century Studies*, 2 (1968), 7－25.

(39) GCB, p. 288〔二〇五頁〕。あるいは、より端的には、「命題の諸含意は必ずしも常に明らかではなく、またその命題を肯定する者にとって歓迎されるものばかりでもない。」（"Reflections on the History of Ideas," *Journal of the History of Ideas*, 1 (1940), 3－23, p. 23）.

(40) Quentin Skinner, "Meaning and Understanding in the History of Ideas," *History and Theory*, 8 (1969), 3－53を参照。次段落の引用語句も同論文から。その論文でスキナーはこれとほとんど同様の主張をしている。たしかに、思想史における「神話」や「不条理」に対する彼の警告のいくつかは、ある程度理に適っている（〝責任〟の概念に対する極端な見解が背後に読み取れるものの）。しかしそれらの警告も、ラヴジョイの名を挙げたことが不適切に思えるほどに、ことごとくラヴジョイの歴史叙述にあてはまらない。どうあてはまらないのかについては、Oakley (*op. cit.* とくにpp 32－34) が、複数の点から述べている。

(41) ゆえに、行為についての言明には存在者に関する言明の形式がいかにもうまく適合し、また複数の行為の記述の間を（それらが共通の何かについてのものであるとして）等号で結ぶことがとにかく何らかの意味で可能である。

(42) "Present Standpoints and Past History," *Journal of Philosophy*, 36 (1939), 477－489参照。引用は順にpp. 482－483, pp. 481－482から。

(43) 原始主義もまた、一つのまとまりとして言及するに値する独自の歴史を持った観念複合体である。Lovejoy & George Boas,*Primitivism and Related Ideas in Antiquity* (Baltimore, 1935) 参照。

(44) Lovejoy, *op. cit* (1939)., p. 481.

(45) *ibid*, p. 482.

(46) *ibid*, p. 482.

(47) Lovejoy, *op. cit* (1940)., pp. 20－21参照。そこで彼は、思想史の持つ「揺らぎの性質」について述べている。"原理"や"法則"はラヴジョイの叙述になじまない。シノプティックな視点および"弁証法的"叙述パターンの多用という彼の叙述の特徴から考えれば、この点は注目すべきである。

(48) "Reply to Professor Spitzer," *Journal of the History of Ideas*, 5 (1944), 204－219を参照。

(49) Lovejoy, *op. cit* (1939)., p. 484.

(50) Lovejoy, *op. cit* (1940)., p. 7.

(51) Lovejoy, *op. cit* (1939)., p. 484.

(52) *ibid.*

ラヴジョイに関連する引用、参照文献一覧

Gram, Moltke S., and Richard M. Martin, "The Perils of Plenitude: Hintikka contra Lovejoy," *Journal of the History of Ideas*, 41 (1980), 497－511.

Knuuttilla, Simo(ed.), *Reforging the Great Chain of Being* (Dordrecht, D. Reidel Publishing Company, 1983).

Kvastad, Nils B., "On Method in the History of Ideas," *International Logic Review*, 9 (1979), 96－110.

Lovejoy, Arthur O., *The Great Chain of Being: A Study of the History of Ideas* (Cambridge, Mass., Harvard University Press, 1936)〔『存在の大なる連鎖』、内藤健二訳、晶文社、一九七五年〕。ラヴジョイ特有の用語は邦訳書に従ったが、引用文は文章全体の流れを考慮して私訳した。

——, "Present Standpoints and Past History," *Journal of Philosophy*, 36 (1939), 477－489.

——, "Reflections on the History of Ideas," *Journal of the History of Ideas*, 1 (1940), 3－23.

——, "The Meaning of Romanticism for the Historian of Ideas," *Journal of the History of Ideas*, 2 (1941), 257－278.

——, "Reply to Professor Spitzer," *Journal of the History of Ideas*, 5 (1944), 204－219.

——, *Essays in the History of Ideas* (Baltimore, The Johns Hopkins Press, 1948).

——, *Reflections on Human Nature* (Baltimore, The Johns Hopkins Press, 1961). 内容は一九四一年のサウスモア大学での講義に基づく。

——, *The Thirteen Pragmatisms and Other Essays* (Baltimore, 1963). 没後刊行された論文集。一九〇八年から一九三三年にかけて発表された論文を含む。

——, and George Boas, *Primitivism and Related Ideas in Antiquity* (Baltimore, The Johns Hopkins Press, 1935).

Mink, Louis O., "Change and Causality in the History of Ideas," *Eighteenth-Century Sutdies*, 2 (1968), 7－25.

Oakley, Francis, *Omnipotence, Convenant, & Order: An Excursion in the History of Ideas from Abelard to Leibniz* (Ithaca, Cornell University Press, 1984).

Skinner, Quentin, "Meaning and Understanding in the History of Ideas," *History and Theory*, 8 (1969), 3－53. この論文は後に論文集に収められ、その抄訳も最近出版された（半沢孝麿・加藤節編訳、『思想史とはなにか』、岩波書店、一九九〇年）が、本論文では初出時のものを参照した。

Wiener, Philip P., "Some Remarks on Professer Mink' s Views of Methodology in the History of Ideas," *Eighteenth-Century* Sutdies, 2 (1968), 311-317.

Wilson, Daniel J., "Lovejoy' s *Great Chain of Being* after Fifty Years," *Journal of the History of Ideas*, 48 (1987), 187-206.